

2024年度 自己評価報告書

学校法人釧路キリスト教学園
幼稚園型認定こども園湖畔幼稚園

本園の教育目的

《神さまの愛と恵みのもとに生かされている喜びを分かち合う。》

神さまが愛をもって造られた世界は、恵みに満ちています。特に神さまのかたちに造られた私たちには神さまの限りない愛が注がれています。その神さまの愛と恵みに出会い、感動と喜びを体験し、自分自身がかげがえのない人間として生かされていることを知る時、他の人もまた同じように尊い命に生きていることに気づくのです。互いにその喜びを分かち合い、共に生きることを具体的に体験していきます。

園生活を通して、神さまの愛のもとで保育者や友だちと喜びを共にし、自分を愛し、他の人を愛し、自然を大切にする、調和のとれた人間性の教育を目的とします。

本園の教育目標

- ・子どもが、自分自身が大切な存在として受け入れられていることを感じとり、自分自身を喜びと感謝をもって受け入れることができるようになる。
- ・子どもが、イエスさまを身近な存在として知ることを通して、見えない神さまの恵みと導きへの信頼感を与えられ、イエスさまと共に、日々を歩もうとする思いを与えられる。
- ・子どもが、自分と他の人との違いを認めると共に、違いを認めつつ一緒に生活するための努力ができるようになる。
- ・子どもが、こころを動かし、探求し、判断し、想像力をもち、創造的に様々な事柄に関わるようになる。
- ・子どもが、私たちの生きる自然や世界を神さまの恵みとして受けとめ、自然や世界の事柄に関心をもち、自分たちのできることを考え、行うようになる。
- ・子どもが、してはいけないことをしようとする思いが自分の中にあることに気づき、そのような思いに抵抗することができるようになる。

今年度重点的に取り組む内容

年主題 『さあ、漕ぎ出そう 奏でよう』

年主題聖句『わたしは道であり、真理であり、命である。』ヨハネによる福音書14章6節

1. 《キリスト教保育》年主題『さあ、漕ぎ出そう 奏でよう』の、「奏でよう」は園に集うありとあらゆる人たちが、自分の弱さも出し合い、信頼をもってお互いに助け合えるような場になることで、園が人々をつなぎ、お互いの声を聴いて響きあえるよう願いが込められています。そして、「さあ、漕ぎだそう」の言葉に込められているのは、進む方向を示して下さるイエス様に促されて、安心して漕ぎ進む私たちの姿です。

インマヌエルの主であられるイエス様が与えてくださる平安の中で、子どもも大人も互いに許し合い支え合う、愛に溢れた関係を日々の保育の中で深めるよう努める。

2. 《保育の計画性》園が子どもたちにとって安心できる園であることを求める1年とした。こどもも大人も一人ひとりがそれぞれに個性があり、その色合いに違いがあることを互いに認め合い、尊重し合える関係性を深めていく。オーケストラが様々な音を組み合わせることで、心に響く素晴らしい音楽が奏でられるように、それぞれの得意なことや不得意なことを組み合わせ、互いの弱さも補い合い、子どもたちにとって安心できる園となるように保育を計画する。そして、子どもたち同士が相互に関わり合いながら興味関心を広げて存分に遊びを展開し、わくわく感が生まれる子ども主体の保育を大切にする。
3. 《危機管理及び教職員間の連携》保育事故などの事例など情報を収集し、自園に置き換えて考察することなどを通じて、危機管理についての意識を高くもつことができるようにする。また、様々な事故を想定して避難訓練を行い、確実に子どもたちの安全を確保できる力を養う。教職員全員で消防関係者による救急救命の講座に参加し、緊急時にも対応できる力を身につけ、教職員間の連携を深める。
4. 《保育者としての資質》保育の専門家としての質の向上を目指すため「子どもの人権擁護のためのチェックリスト」を継続して用いて、自らの保育を振り返り、保育者としての適切なあり方についての意識を高める。自らが意識せずに「子どもを置き去りにした保育」や「保育者の都合ですすめる保育」を行っていないかの自己点検を定期的に行い、「子どもを尊重する」ことや「子どもの人権擁護」についての意識を高める。
5. 《保護者への丁寧な対応》小さな怪我やトラブルについてであっても、保護者への伝達を丁寧に行い、しっかりと伝える。子どもの園での姿について電話やブログなどの連絡ツールを用いて伝え、相互の信頼感を深める。
6. 《自然や地域社会とのかかわり》季節ごとに自然に十分に触れて遊べるように外遊びを積極的に取り入れ、「自由あそび」や「みんなの日」を充実させて、小さい子への思いやりやいたわりの心、また、大きい子へのあこがれや挑戦する気持ちなどを十分に感じることができるように異年齢の関わり合いを深めつつ過ごす。また、老健施設や地域の方々との交流をもち、社会に視野を広げることができるように促す。
7. 《研修及び研究》キリスト教保育指針の改定を受け、教育要領の学びを行い、個々の保育力のアップを図る。また、受けた研修が聞いただけとならないように、研修レポートを作成して、研修内容を教師間で共有、日々の保育に生かすようにする。

評価項目	取り組み状況	評価
Ⅰ 保育の計画性	昨年の年間テーマ『いっしょに』のもと、培われた様々なつながりを土台にして『さあ、漕ぎ出そう 奏でよう』と歩み始めた今年度。《キリスト教保育》を担う各保育者が、一人ひとりの個性を認め合い、共に許し合って互いの響きに耳を傾けながら『奏で合う』ことを大切に、「安心」した園生活を送ることに努めた。 - 園における一日の活動が礼拝から始められている生活の中で、心を落ち着かせて礼拝に臨み、心から祈ることに努め、大人も子どもも安心して生活することができた。一日の生活の流れの中で、日々聖書のお話に触れることや自分の言葉で祈ることなど、より丁寧な礼拝を目指したい。 - 子どもが遊びの中でさまざまな経験を通して育つことから、子どもたちが友だち同士で話し合ったり、考え合ったりして互いに関わり合いながら十分に遊びこめる環境づくりを心掛けた。年齢の低いクラスでは発達段階や興味にそった適切な環境設定に難しさを感じつつも、子どもにとって居心地の良い場所となるように配慮した。	3.25 (3.6)
Ⅱ 保育の在り方・幼児への対応	オーケストラが様々な音を組み合わせることで、心に響く素晴らしい音楽が奏でられるように、一人ひとりがその個性を認め合い、受け入れ合って生活し、互いに信頼関係を深めて「わくわく」した気持ちで過ごすことができるように配慮した。 - 年度初めの入園式後、教職員全体で救急救命士による講習を受け、園における危機管理マニュアルを再確認した。一人ひとりの命を守る貴重な学びの時となり、安心安全の保育体制を確認し合い、緊急時にも対応できる力を身に付けて1年間をスタートすることができた。毎月の避難訓練においても、緊急時に大切なこと、命を守る行動について、子どもたちが分かるように伝える工夫を行い、真剣に訓練に臨むように促すことができた。また、訓練の計画・実行・振り返りの流れを整えることで、危機管理マニュアルにも基づいた計画や見直しが行われていくように改善していく。訓練内容も形式的にならないように、命を守る行動としてより現実感のある訓練を行っていく。 - 各学年の発達段階や興味、各クラスの状況に応じて、子どもたちの個性や「やってみたい」の気持ちを尊重した子ども主体の「わくわく」した保育を心掛けた。そのために、年齢や経験年数の違う各保育者が、互いを認め合い、意見を尊重し合い、協力し工夫し合って保育準備を行うように努めた。互いの信頼関係を深め、心の余裕をもちつつ豊かな保育に努めた。 - 行事を一つずつ経験することで、その都度充実感や達成感を十分に得て、子どもたちの豊かな成長につなげることができた。子どもたち一人ひとりの良いところや得意な所が生かされるように、子どもの気持ちを尊重して取り組むことができた。	3.7 (3.8)
Ⅲ 保育者としての資質・能力・良識・適正	子ども同士の関わりの姿を捉え、その姿の内にある心の動きについても推察できるような教師として、細やかな目や、その場の状況に応じて適切な援助ができる力を養うことが大切である。日々の遊びの中で教師が子どもたちと十分に関わりあって遊び、子どもたちの思いや考えに共感しながら一緒に活動することを大切にしつつ、子どもたちの育ちを支えることができる教師の質の向上を目指す。 「子どもの人権擁護」についての学びを行い、気づかぬうちに「子どもたちの心を傷つけたり人権を無視したりする言葉や態度、不適切な関わり方をしてはいないだろうか」と自らの普段の保育を振り返り、教師としての適切なあり方についての意識を高めることができた。また、保育を日々振り返る際、言葉がけや促し方、態度などについて話し合い、自己評価を行って改善に努めた。 - 日々の保育を各教師が「楽しい」と感じ、保育を「喜び」と感じている評価結果となった。また、教師としての誇りと自覚をもち、子どもたちの前でももちろんのこと、保育時間外でも教師としてのふさわしい言動を心掛けるよう努める。また、教師自身が心のゆとりをもち、子どもたちの興味関心をキャッチすることができる感性を大切にす。	3.8 (3.8)

IV 保護者への対応	昨年度の自己評価結果から、子どもたちや各家庭へ配慮をしながら、教職員全体で保護者への丁寧な声掛けと対応を心掛けた。電話や連絡ノートに加え、ブログや面談など様々なツールやおたよりで写真を用いるなどしてより分かりやすく、園の様子が伝わるように工夫し、相互の信頼関係が深まるように努めたことが高評価として表れた 1. 保育中の小さな怪我についても報告し合い、教師全体で受け止め、怪我記録を見直すことで普段の生活の中での課題や問題点に目を向け対処しながら過ごしてきた。怪我をした状況全体を把握して、保護者に丁寧に伝えるように心掛けた。教師間の連携を強め、怪我の状況をしっかりと把握できるようにする。 2. 保護者からの相談や質問などには丁寧に対応するよう心掛けたが、言葉による説明が不足し、十分な理解に至らないこともあり、その都度教師会で振り返り、反省点を次に生かすように努めている。	3.8 (3.5)
V 地域の自然や社会との関わり	各学年がそれぞれ、地域の公園で自然に触れて遊び、公共施設などでさまざまな発見をして、「わくわく」と興味や関心を広げるような保育に努めた。 1. 日頃から異年齢の関わりを意識して生活し、自由あそびや「みんなの日」の活動、一緒に給食をいただくなどして無理なく関わりをもつことができた。上の学年はお世話をしようとする意識が強くなるなど良い関係性を深めることができた。 2. 年長児の取り組みでは木育マイスターの協力を得て、木材工場見学やワークショップを行い、釧路の木材について知り、釧路の自然に触れる機会となった。 3. 園舎周辺の近隣の方々との交流も、収穫感謝礼拝でささげられた果物を子どもたちが直接持参して行われた。また、秋の収穫を感謝して4年ぶりに、普段お世話になっている釧路教育大学の皆さまや老健たいようの方々を迎えて、カレーパーティーを開催することができ、大きな喜びとなった。その中、自宅前の畑を使用させていただいていた秋山さんが施設に入所となり、畑の利用や園舎から声をかけて交流することができなくなった寂しさを覚えている。 4. 毎年継続している老健たいようの利用者の方との交流は、コロナ禍によりリモートでの交流を余儀なくされていたが、今年度のクリスマス交流においては4年ぶりに利用者の方が直接園に訪れてくださった。直接目と目を合わせての交流に老健たいようの方々も子どもたちも共に喜び合うひとときとなった。 5. 子育て支援事業「ウェルカムデー」を月2回の頻度に増やし、近隣の小さな子どもたちが園に気軽に遊びに来ることができるようにした。継続して利用することで保護者の方々が互いに顔見知りとなり、子育てについての悩みなども安心・信頼して話すことのできる場となっている。 6. 小学校の運動会に見学させていただき、年長組クリスマス会を近隣の校長先生が見学してくださった。また、小学校の生活科の授業で子どもたちが来園し、幼稚園の職務についての学びを行い交流のときとなった。今後、幼稚園と小学校の連携をより深めていきたい。また、近隣の中学校や高校から、職業体験に訪れる学生も増え、子どもたちとの交流が深められている。	3.3 (3.5)
VI 研修と研究	オンデマンド形式やオンライン形式の研修が充実し、自分のペースで必要な研修を受けることができるため、研修への意識も高まり臨時職員も含めて全体で、15名が36講座を受講。自己課題をもって受講し、受けた研修についてのレポートを提出して教師全員で共有するようにしたこと、研修内容が普段の保育に生かされていることを実感している。 1. 課題であったキリスト教保育改訂版の学びについて、研修を受けるだけでなく、日々の限られた時間の中でも少しずつ学びを進め、園の教育理念や教育方針についての理解に努めることができた。 2. 豊かな学びを行うことでさまざまな課題に目を向けることができた。他教師のレポートを共有することで、自分の課題や反省点、いろいろな視点からの発見などがあり、考える幅が広がって柔軟に考えることができるようになったと感じている。今後、正職員のみならず保育にあたるもの全員が子どもたちの前においては同じ一教師であるとの認識を高め、教師全体の質の向上をはかり、主体的・積極的な学びを積み重ねていく。	3.5 (3.4)

次年度以降に取り組む課題

年主題『ともに』 2025年度年主題聖句 「わたしはあなたと共にいる。」 イザヤ書43章5節

1. 年間テーマ『ともに』に基づき、大人も子どもも、ともに神さまの恵みと平安の中で、「安心」した園生活を送ることに努める。特に礼拝を大切にし、週のはじめに行われている合同礼拝で聴く聖書のお話を、クラス礼拝においてもできるだけ取り入れ、子どもたちが自分なりの言葉で祈る機会を増やし、神さまとの対話を深めて、より丁寧な礼拝を目指す。
2. 環境教育の中で取り組まれてきた木育活動を、昨年に引き続き行い、釧路の木や身の回りの木についての理解を深めながら過ごす。園庭での植樹活動や草花の栽培活動を通じて、自分たちの園庭が遊び場としてより豊かになるように水やりをしたり、雑草を取ったりして活動し、環境への興味関心が深まるように配慮する。
3. 子どもが遊びの中でさまざまな経験を通して育つことを重点的に捉え、普段の遊びの環境を整える。年齢や発達段階、興味や関心に沿った環境を整え、子どもたちが友だち同士で話し合ったり、考え合ったりして互いに関わり合いながら十分に遊びこめるように工夫する。また、日々の遊びの中で教師が子どもたちと十分にに関わりあって遊び、子どもたちの思いや考えに共感しながら一緒に活動することを大切にしつつ、子どもたちの育ちを支える。
4. さまざまな危機を想定した毎月の避難訓練で、子どもたちの防災、防犯意識を高める。また、訓練の際の計画・実行・振り返りの流れを整えることで、危機管理マニュアルにも基づいた計画や見直しが行われていくように改善していく。訓練内容も形式的にならないように、命を守る行動としてより現実感のある訓練を行っていく。また、子どもたちのトラブルや怪我の状況をできるだけ把握するように、教師間同士の連携を深め、報告・相談の上で、保護者に対しても丁寧に伝えるように努める。
5. 年間テーマ『ともに』を意識して生活し、人との関わりを深め、他者とともに活動することで豊かな人間関係を築く。園内の異年齢の関わりにおいては、日々の自由あそびや「みんなの日」の活動、一緒に給食などで無理なく関わりを深めることができるようにする。また、地域との交流にも積極的に出かけさまざまな人との交流に努める。園と小学校の連携においては、年長児の小学校一日体験入学だけでなく、合同避難訓練や学習発表会の見学などを行うなどして、より関係性を深めていく。
6. 保護者一人ひとりとの信頼関係を築くように心掛け、各家庭への丁寧な対応を行う。緊急お知らせメールやおたよりの配信について、スマートフォンアプリの導入によって配信しやすい形で保護者も見やすいものへと整える。また、登降園システムへの打刻や請求書の配信などの機能を利用し、円滑な連絡ツールとして利用を広げる。
7. 正職員のみならず保育にあたるもの全員が子どもたちの前においては同じ教師である。その上で正職員、臨時職員の別なく子どもへの理解を深め、子どもの人権を尊重した保育を行う教師力を高める。そのための研修への参加を励行し、学びを積み重ねていく。